

文化史發展の過程（其二）

小林 秀雄

私はいまコムの學說が発生するに至つた経路を敘述すべき時を有たない。私はこゝには只ラムブレヒトを記述すべき階段としてコムの學說を紹介するものであることを注意して置かねばならぬ。

アウグスト・コント（Isidore August Marie Francois Xavier Comte 1798—1857）の科學的社會學の根抵とその歴史哲學とに關する要領は、彼の不朽の作物なる「實證哲學階梯」Cours de philosophie positive（1830—43）及び「實證的精神に關する論議」Discours sur L'esprit positif（1844）によつて知ることが出来るが、殊に紀元一八三九年に現れた前書の第四卷は最重要なもので、彼は此の作物の中に、彼の社會科學の根抵と歴史哲學の要領を述べてゐる。彼は先づ何が社會生活發展の條件であるか *statistique sociale* またそれらの何れが社會發展上に重大な勢力を示すものであるか *dynamique sociale* を研究し、結局理性 *raison* が社會發展の中心勢力であり、文化の進歩に伴ひ感覺的本能、想

像、熱情等 *functions effectives* は之によつて制限されるものであると考へたが、同時に他の要件の勢力を看過せず、またその價值を尊重して、人間社會の總發展は個々の民族の智的教育の階段によつて決定さるべきものであるといふ結論に達した。かくて彼は歴史を大觀して、この教育は三つの階段をなしてゐることを發見した。即ち其一は神學的、或は傳說的思考階段であつて、人間がまだ著しく想像によつて支配されて居つて、主としてその周圍の現象をば多少超自然的勢力の働作であるとして説明してゐる。其二は形而上的、或は抽象的思考階段であつて、主として抽象的理想、實在論、究局原因等によつて總ての現象を説明してゐる。其三は科學的、或は實證的思考階段であつて、正確な科學的な研究法の助力によつて實際現象の上に行はれる一切の法則を認識し、且つ之を一般法則に導くに勉めるのである。彼はその天才的態度を以て、此等の各階級にあつて、それぞれ思考法により、總ての社會關係、即ち宗教的、道德的、經濟的關係が構成され、また之に應じて變化されるものなることを主張し、第一階段にあつては、神學、專制政治、軍國主義、第二階段にあつては封建制度、立憲組織及び中世後半期と新時代との過渡的狀態、第三階段にあつては、科學的政治及び科學的産業を見るといふて居り、また智識上の研究も之と歩調を同うして變化するもので、即ち先づ數學、次には天文學、物理學、化學、生物學、最後は社會學及び歷史學が生ずるといふてゐる。而して彼はこの社會學及びその動的の部分 *partie dynamique* として歴史を實證科學たらしむること

が、最重要な問題であると考へたのである。彼は國家及び社會に於ける現象を以て、發展の一般法則に基づて動いてゐる連續的なものであると解釋し、他の歴史記述に見るが如き記述的のものでなくして眞に科學的のものたらしめんと企てた。彼の發見した智力的發展の三つの階段の順列は、この意味に於て歴史の根本原則と見らるべきである。

コムトは決して唯物論者ではない。少くとも生物學的唯物論者でない。彼は總ての社會現象を單純に自然史の繼續であるとして見て、之を生物學によつて説明することの誤謬なることを高調して居り、また社會範圍には人間の總ての動物的方面を決定する生物學的要件以外に、幾多の異なる要件の存在することを認めて、之によつて社會學を科學として生物學の上に位せしめてゐる。彼の社會學は勿論その獨特の法則を有し、この社會法則なるものが如何にして成立するか、社會發展を生ぜしめる人間才能は何處より來るかについては形而學的説明を排斥し、總ての認識を只事實其物の外的觀察より得るに勉め、社會心理學的に考察することが最良の方法であると認めてゐる。彼はこの點よりして各種の文化時代 *âges de civilisation* なるものを比較して社會運動の條件及び變化を説明する眞實なる科學的見解を構成し、且つ種々なる歴史的特殊範圍の階段を支配する概念に到達すべき比較的歴史研究法 *méthode historique comparative* を研究し、かくて其結果として歷史上に於ける集

合的勢力に重きを置き、個人勢力を以て第二位のものとなし、個人勢力は決して文化條件及びその法則的過程を根本的に變更し得るものに非ずして、如何なる天才といへども人類精神の總發展 *développement collectif de l'esprit humaine* に從屬し、同時に社會狀態に附隨すべきものであり、その最好都合なる場合に於てすら、その實現の分量と種類とを變更し得るものでないといふてゐる。

かくてコムトは總ての範圍の上に、時々、思考法によつて確實に決定された文化時代に於ける社會發展の規則的變化を考へ、また同時に眞面目に最初の社會心理的な觀察を建設して、之を實現することを考へた。ハインリッヒ・マイエルが其作「歴史的認識」*Heinrich Maier, Das geschichtliche Erkennen* に言ふてゐる如く「コムトの社會學的歴史觀察は非常に僅少な、且つ非常に不十分な觀察事實材料の觀察による急速な抽象と人間の中に存在する集合精神に關する持久性に乏しい假定とに基づく」もので、彼はこの際必然自己が認識せざりし偏見に陥るべき筈であつたが、彼の眞實な歴史經過に對する深遠なる智識が彼をしてその思想を究局まで追及することを遠慮せしめて、爲に多數の此派の人々が陥つてゐる危険から免れしめたものであり、實に之は彼に取つて非常な幸福であつた。なほマイエルが言ふてゐる如く「このフランスの社會學の觀念である人間及び個々の民族の歴史を三つの階段及び之を補足してゐる一般法 *Solilarite' od. consensus* なる狹隘なる形式中に押

込まんとする努力が、今日もなほ全然消滅してゐないことは明白であるが、殊に常に進化的思想の魔力が有力に働いて居つて動物生活の一般發展を人間にまで追及して、この過程の重要な條件のみならず、その全體の傾向までも之に依つて決定せんとする學說の結論をば、人性の歴史的發展に、またその中に働いてゐる勢力に、またそれが取り、或は取るべきものと假定されてゐる進行にも期待してゐることも明白であり」その勢力の侮る可らざることを示してゐる。實にイギリスのバックル *Henry Thomas Buckle*、ハッキー *William Edward Hartpole Lecky*、フランスのテーヌ *Henry Hypolyte Taine* の如き、皆其遺跡を承けてゐるのであるが、この思想を承けて文化史上の劃期的な事業を残したのはカルル・ラムブレヒトであると思ふ。

然しラムブレヒトが一層直接な影響を受けたのはヴントであつて、彼は寧ろヴントを通してコムトの實證主義を承けたものと見られないでもないからラムブレヒトについて考ふる前には一應ヴントの歴史觀察を承知して置くことが重要であると考え、之は他日別にヴントの歴史理論を書く者であるから、今は略することゝする。

カル・・ラムブレヒト *Karl Lamprecht* (1856—1915) の歴史的本質及び歴史記述に關する意見は彼の大作なる「ドイツ史」*Deutsche Geschichte* (1891—1915) に記されてゐる。彼は紀元一八九一

年以來本書十二卷と追加三卷とを出し、有史前時代から紀元一九〇〇年までのドイツの歴史を彼獨特の文化史的方法を以て記述した。後彼は更に六卷を増補する豫定であつたが、二卷だけを公にした後、この世を去つたのである。なほこの大作の外に彼の歴史意見を知るべき幾多の小論文がある。ハーチー・ズルンハイムの「歴史研究法」E. Bernh. im, Lehrbuch der historischen Methode 及びフリードリッヒ・ザイフェルトの「カール・ラムペンハートの歴史哲學に關する論争」Friedrich Seiert, Der Streit um Karl Lamprechts Geschichtsphilosophie 等の書によつて、彼の小論文を擧げて見ると「紀元十四世紀より同十八世紀に至るドイツ制度の發達階段」Die stufen der deutschen Verfassungsentwicklung von 14. bis 18 Jahrhundert. (Festschr. z. deutsch. Historikertag in Leipzig 1894) 「ドイツ・スラムペンハートの経済史批判」K. Th. v. Inama-Sterneggs Wirtschaftsgeschichte (Jahrb. f. Nat. u. Stat., 64, 1895) 「ハーペルの光榮」Die Herrlichkeit Eppel (Beiträge zur Geschichte, vornehm. Kölns und der Rheinlande, Köln, 1895) 「史學の現在の位置」Die gegenwärtige Lage der Geschichtswissenschaft (Zukunft 14, 1896) 「歴史的研究の作業領域」Das Arbeitsgebiet geschichtlicher Forschung (Zukunft 15, 1896) 「史學の新舊兩派」Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft (1896) 「史學の新舊兩派の相違とその事」Zum Unterschiede der älteren und jüngeren Richtungen der Geschichtswissenschaft (Historische Zeitschrift 77, 1896) 「ロー・ハンナ

のライプニッツの記述によつて中古末に於ける教會政治及び教會關係なる論文に對する批判」Rezension der Schrift H. Finkes, Die kirchenpolitischen und kirchlichen Verhältnisse zu Ende des Mittelalters nach der Darstellung K. Lamprechts, Bonn, 1896. (Deutsche Zeitschrift f. Geschichtsw., N. F. 1896—97, Monatsbl. 1) 「現在の史學の問題」Die geschichtswissenschaftlichen Problem der Gegenwart (Zukunft 17, 1896) 「文化史とは何ぞ」Was ist Kulturgeschichte (Deutsche Zeitschrift f. Geschichtsw., N. F. 1, 1896—97) 「歴史に於ける個性・觀念及び社會心理的勢力」Individualität, Idee und sozialpsychische Kraft in der Geschichte (Jahrb. f. Nat. u. Stat., 68, 1897) 「史學の理論家としてのヘンデル及びカント」Herder und Kant als Theoretiker der Geschichtswissenschaft (Jahrb. f. Nat. u. Stat., 69, 1897) 「史學的論争の轉回」Eine Wendung in Geschichtswissenschaftlichen Streit (Zukunft 18, 1827) 「説明」E.klärung (press. Jahrb. 89, 1897) 「11の論争文」Zwei Streitschriften (1897) 「史學論の集束」Der Ausgang des geschichtswissenschaftlichen Kampfs (Zukunft 22, 1897) 「終論」Epilog (Zukunft 22, 1898) 「歴史教育に關する近代的要求とその書狀交換」Briefwechsel über moderne Forderungen an den Geschichtsunterricht (Neue Jahrb. f. d. Klass.-Altst. u. pädagogik 1898) 「ドイツ史學の發展諸段階とその事」Ueber die Entwicklungsstufen der deutschen Geschichtswissenschaft (Zeitschr. f. Kulturgesch. 5, 1898) 「ドイツ史學の發展」Die

Entwicklung der deutschen Geschichtswissenschaft, vornehmlich seit Herder (Münch. Allgem. Ztg., Beil. Nr. 83 v. 15, 4, 98)「ツローの歴史研究法」Die historische Methode der Herrn von Below (1899)「現在の史學的解釋の中心點」Die Kernpunkt der geschichtswissenschaflichen Erörterung der Gegenwart (Zeitschr. f. Socialwiss. II. 1899)「史學問題の解釋上の變化」Wandlung in der Auffassung der Aufgaben der Geschichtswissenschaft (Zeitschr. f. Sozialwiss. II, 1899)「ヤーハンターの自然科学的觀念構成の限界の批判」Rezension von H. Rickert, Grenzen der naturwissensch. Begriffsbildung (Liter. Zentralbl. 1899. Nr. 2)「ツヤムル於ける歴史研究法」La Méthode historique en Allemagne (Revue de synthèse historique 1. 1900)「文化史研究法」Die Kulturhistorische Methode (1900)「ツヤムルの最近の過去」Zur jüngsten Vergangenheit Bd. 1—3. (1902—6)「歴史の概念と歴史的及び心理的法則のツヤム」Ueber den Begriff der Geschichte und über historische und psychologische Gesetze (Annalen der Naturphilosophie II. 1903)「近代史學」Moderne Geschichtswissenschaft (1900)「世界史的研究法のツヤム」Zur universalgeschichtlichen Methodenbildung (Abhandlungen der sächsischen Akademie der Wissenschaft 57, 1909, Nr. 2)「歴史研究法及び歴史的・アカデミックス的教育」Historische Methode und historisch-akademischer Unterricht (1910)「高等學校改革に關するツヤムの演説」Zwei Reden zur Hochschuleform (1910)「歴史的思考の概説」Einführung in das

historischen Denken (Veröffentlichung d. Gesellschaft, "Neue Bahnen," Leipzig 1912)「ツヤムルの最近の過去及び現在の歴史」Deutsche Geschichte der jüngsten Vergangenheit und Gegenwart (1912)「紀元一七五〇—一九一四年間のドイツの勃興」Deutscher Aufstieg 1750—1914 (1914)等があるが雑誌類は容易に手に入りかねるので、今は主として單行物に居るもの、また手許にある小数の雑誌によることとした。

序にこゝにラムブレヒト研究者の便宜の爲に、前記の二書によつて、彼に關する反對論文及び批判論文を擧げて置くこととする。之にはツローの「ライプニッツのドイツ史第一—三卷の批判」G. V. Below, Rezension vom Lamprechts Deutscher Geschichte, Bd 1—3. (His. Zeitschr. 71, 1893) マクスマ・ハーゲン①「ライプニッツの就任演説」Max. Lehmann, Leipziger Antrittsrede (Zeitschr. f. Kulturgesch. 1, 1894) ヘルマン・ホルツ②「史學に於ける唯物主義の侵入」Friedrich Aly, Der Einbruch des Materialismus in die Historischen Wissenschaften Preuss. Jahrb. 81, 1895) マン・ライプニッツ③「ライプニッツのドイツ史第四卷批判」F. Raehfall, Rezension des IV. Bds. von L. s Deutscher Geschichte (Deutsche Literaturzeitg 1895) ツロー④「ライプニッツのツヤムルの光榮の批判」Rezension des Aufsatzes von Lamprecht "Die Herrlichkeit Eypel"

(Hist. Zeitschr. 76, 1896) ハー・ンインケの「カール・ラマンハートの記述による中古末の教會政治的及び教會的關係」H. Finke, Die Kirchengpolitischen und Kirchlichen Verhältnisse zu Ende des Mittelalters nach der Darstellung Karl Lamprechts (Röm. Quartalschr. f. christl. Altertumskunde u. f. Kirche gesch., 4 Suppl. H., Rom 1896) ハン・フイネンケの紀元一八九六年刊未來誌十四のラマンハートの論文について(注意) F. Meinecke, Notiz über L. s Aufsatz in der Zukunft 14, 1896 (Hist. Zeitschr. 76, 1896) 同氏の答辯 Erwiderung (Hist. Zeitschr. 77, 1896) ハン・ラマンハートの「經濟的論點から見たラマンハート史」F. Buchholz, Deutsche Geschichte vom wirtschaftlichen Standpunkt (preussische Jahrbücher 1896) 同人の「ラマンハートの歴史の新舊兩派の批評」Rezension von Lamprechts "Alte und neue Richtungen" (preussische Jahrbücher 84, 1896) 同氏の「ラマンハートのドイツ史第五卷批評」Rezension des V. Bd. Lamprechts Deutsche Geschichte (Mittlgn. d. Instit. f. österr. Geschichtsforschungen 17, 1896) ハヤ・マンナの「ラマンハートのドイツ史第五卷批評」M. Lenz, Rezension von Lamprechts Deutsche Geschichte, V. Bd. (Historische Zeitschrift. 77, 1896) ハン・ラマンハートの「集合派史學の原理について」Ueber die Theorie einer kollektivistischen Geschichtswissenschaft (Jahrbücher fuer Nationalökonomie und Statistik 1897) ハー・マンナの「個人主義及び集合主義史觀」O. Hintze, Ueber individualistische und kollektivistische Geschichts-

aufassung (Historische Zeitschrift 78, 1897) ハー・ミリーマンの「ラマンハートのドイツ史」G. Schnurer, Lamprechts Deutsche Geschichte (Historisches Jahrbuch der Görresgesellschaft 1897) ハン・フイネンケの「辯明」Erwiderung(Historisches Jahrbuch 78, 1897) ハー・マンナの「最近ドイツ歴史記述の史料解剖について」H. Oucken, Zur Quellenanalyse modernster deutscher Geschichtsdarstellung (preussischer Jahrbücher 89, 1897)) ハー・ンインケの「發生的及び僧侶的歴史觀察」H. Fincke, Genetische und Klarikale Geschichtsauffassung (1897)カール・フイネンケの「未來」誌上の論文 H. Delbrück, Zukunft 22 und 23, 1898) フリントマンの「史學雜誌」上の論文 Max Lenz, Historische Zeitschrift 80, 1898. ハー・マンナの「ラマンハート辯護」H. Oucken, Lamprecht Verteidigung(1898)ハー・マン・ツローの「新歴史研究法」Die neue historische Methode (Historische Zeitschrift 81, 1898) 同人の「ラマンハートのツローの歴史研究法についてを答へて」Erwiderung auf Lamprecht Aufsatz "Die Historische Methode des Herrn G. von Belows" (Deutsche Literaturzeuungen. 1899) 及び同人の史學雜誌上の同種の論文 Historische Zeitschrift 82, 1899) 同人の「民族の經濟的發展の原則について」Ueber Theorien der wirtschaftlichen Entwicklung der Völker usw. (ebenda 1901) ハー・ツランハイムの「近代史學」F. Bernheim, La science historique moderne (Revue de synthése 1905)ハナー・ワグナーの「集合派的史觀の問題について」W. Wagner, 文化史發展の過程(小林秀雄)

Problem der Kollaktivistischen Geschichte betrachtung, Dissertation (Greifswald (1905) ヌーワイヌのラムブレヒトの歴史哲學] B. Weiss, Lamprechts Geschichtsphilosophie (1906) ヌー・クーネルトの「カルル・ラムブレヒトの歴史論に關する論争」A. Kuhnert, Der Streit um die geschichtswissenschaftlichen Theorien K. Lamprechts (1906) エント・スコームの「カルル・ラムブレヒトの歴史哲學」J. Spiess, Die geschichtsphilosophie von Karl Lamprechts (1921) 及びハーードリッヒ・ザイフェルトの「ラムブレヒトの歴史哲學に關する論争」Friedrich Seifert, Die Streit um Karl Lamprechts Geschichtsphilosophie (1925)等のものがあるが、此等の總てを手に入れることはなかなか容易でない。ラムブレヒトの文化史的考察が實證哲學の基礎の上に存することは争はれない。只こゝに之が一般實證的思考法から出たものが、或はコムトの實證哲學から出たものかといふことが問題となつてゐる。彼は其著「文化史的研究法」の中に「自己の新しい研究法はコムトの思想を歴史學的作業に移したのではないかといふ疑問があるが、この疑問に對してはベルンハイムが言ふてゐる如くに、否定の答をなさねばならない。而してコムトとの意識的な、直接な關係が存しないことを確言し得る」といふて居り、また「同じ時代の同様な精神的假定で、かゝる密接に類似してゐる方法が新に獨立して發展された」ことを主張してゐる。之についてエー・ベルンハイム E. Bernheim の著「歴史研究法」Lehrbuch der historischen Methodeを見ると、之に「これは勿論二重の同一 Quid pro quo であり、第一に實證主義はラムブレヒト以前二代の間存在して居つた。この觀念を自分で知らなかつたからといふて、新に之を發見したと要求し得られないことはダルビニスムを今日また發見したといふが如きものである。第二にラムブレヒトが考ふる如くに全然獨立に、また純粹に經驗的に彼の主要思想を發見したとするならば之は詐偽である。彼の最高觀念の如き種類の抽象は超經驗的な基本觀察なしには全然得られないものであり、而して吾人はこの基本觀察が根本的に實證主義的なことを知る。今は直接にコムトを知ることなくして實證主義者たり得るのは、無數の人が曾てダルビンの一節をも讀むことなくしてダルビン主義者たるのと同じである」といふてゐるが更に「吾人は先きに如何に種々なる道を通つて實證主義の精神が歐洲文學に移つて行つたかを述べた。シーブーグレ C. Bouglé が實證主義はその建設者の作物を讀むことなくして入り得べき學說であるといふてゐるが、之は特にドイツについて正當である」といふて居る。然しブーグレの詞は彼の時代の如き實證主義が非常な勢力を以て擴まつてゐる時にのみ言ひ得られることであり、また實證主義のみがその建設者の作物を讀むことなくして入り得る學說であるといふ理由は甚だ漠然としてゐる。なほベルンハイムの言の如く特にドイツに於て正當であるといふことも、餘りに勝手な斷言であると思ふ。トレルチの如きも、その著「歴史主義」と其問題 E. Troelrich, Historismus und seine Problem. の中に「ラムブレヒト自身は常に實證主義との關係を争ふてゐるが、實際さきの事實的類似に拘ら

ず、之とは全く没交渉であり、而してヴントを通しての強い影響は更に疑を容れないといふて居り、彼の實證主義はヴントを通して移されたものでコムトとは何等の關係なきことを記してゐる。然し彼は更にコムトとヴントとの關係については何等記す所がないのを見ると、彼もベルンハイム同様にコムトのドイツに於ける影響を否認してゐるものと考へざるを得ない。勿論時代思潮の經路を判然たらしむることはなかなか困難なことではあるが、一般史家がバックル、レッキー其他のイギリス史家に對しては十分にコムトの影響を認めながらドイツ史家に對してのみ、之を拒むべき理由は甚だ不明瞭である。ドイツの思想家が切にフランスとドイツとの間に障壁が存在して居つて之が實證主義の潮流には抵抗し得なかつたが、コムトの學說の侵入は許さなかつたと主張することは大に研究を要すべき問題であると信ずる。尙トレルチ及びロートアツケルの「精神科學序論」[Troeltsch und Rothacker, Einleitung in die Geisteswissenschaften]にラムブレヒトとコムトとの無交渉なることを證明した論文があるといふことであるが、今この書を一讀する機會を得ないので、之は他日に譲らねばならないが、多分先きのトレルチの說と大差なきものと見て宜しからうと思ふ。

私は先づラムブレヒトについて概説を試みる。ラムブレヒトは其著「近代史學」の中に「科學としての化學及び物理學の對象が時代經過に屬する以上は、之を歴史觀察に包含せんとし」といふてゐるのであつて、之に依つて彼が歴史の對象とするものは何であるかは略々想像することが出

來ると思ふ。またその「ドイツ史」の序文に「ドイツ史の中の物質的及び精神的發展力の相互的成果を説明し、物質的及び精神文化の總發展の統一的基礎と發展階段を指示する眞面目なる試を爲さんと欲する」とあつて、彼の歴史の目的の那邊に存すかを窺ひ得る。なほ彼の作「イナマ・スチルネヒのドイツ經濟史批判」には「歴史は過去を判定し、同胞の利用することを將來に教ふることを職とするが故に、最高の職はそれが如何にあつたかを示す如き現在の試を承認するを得ない」といふて居つて、彼はランケの如く「それが本來如何にあつたか」Wie ist es eigentlich gewesen?に満足せずして「それが本來如何になつたか」Wie ist es eigentlich geworden?を知らしむるにあつたことが明白である。彼は實に歴史を以て純正なる科學、即ち實際に人間精神の働作を取扱ふものとなし、一般科學の對象たる物質的本體及びその法則を之に包含せしめんとは考へないが、此等のものがその關係上時代經過に従屬すべきものであることを主張し、總ての生活表現、少くとも人間の精神に入り込み、また人間の精神から出づるもの、即ち自然、若くは之よりも更に大なる關係にあるものであつて、それが時代潮流に干與するものと認められる場合には、之は是非とも歴史記述から遠ざけらるべきものではないといふのである。而して人間の發展、或はその内容から見て、總て人類の文化なるものは、その働作の總體、之より生ずる状態、また兩者の時代的連續に現れるものであるから、歴史は人間の精神的生活發展の記述たるべき、之が文化史であると考へた。彼は歴史を科

學の列に高めんとするに當つて、歴史の事實が十分正確に決定されて居らず、事實が全く疎野であり、形式のない集團であり、之が研究によつて漸く科學を生ずべきものと考へたが、彼には古いプラトンの、アリストテレス的な偏見が存在して居つて、一般科學の認識といふ思想を認めてゐるので、科學的歴史家に對して事實材料の中に正則、典型及び法則を求めしめんとした。而して彼は個別的歴史觀察を排し之を以て單に藝術的捕捉を爲すべきものであるとなし、集合的歴史觀察の地上に立つた爲に、その歴史的科學的方法是比較觀察的抽象によるに至つたのであるが、彼がこの方法で進んだ結果は、時代の諸處に同一な文化階段があり、民族の明白な典型的な發展の存在することを見出し、かくして彼は歴史の時代を之によつて區別した。また彼はかゝる發展を規定すべき社會心理的要件を示さんとした爲に彼に取つては心理學が歴史の基礎となり、歴史は社會心理的科學、換言すれば應用心理學に過ぎざるものとなつたのである。

ラムブレヒトは政治史に對しては熱烈な反抗を有し、之が爲には常にランケ門弟 Jungkianer と爭ふたもので、その著「歴史の新舊兩派」は全くその目的の爲に書かれたものであり、その中に彼は「實際彼等は古いプログラムを以て持續することは出来ない。このプログラムを以て半世紀前に生じた如き特殊狀態の再生を期待するのは大なる誤謬であり、非歴史的であると考ふる」といふ

て居り、フリードリッヒ・マイネッケ Friedrich Meinecke が「吾人はシーベン Heinrich von Siebel 時代の政治的才能を遺産として確立せんとして努力してゐるが、吾人には政治的刺戟が缺けて居るので、吾人には生活の源を閉ざす」といふた詞を全く一笑に附してゐる。勿論彼に取つては政治生活が人類精神生活の最重要な部分とは考へられなかつた。彼が考へた非常に總括的な文化史に取つては、政治史の如きは全くその一部分を爲すものに過ぎないのである。彼の「ドイツ史」の中に彼は「人間の發達は政治的將來への奴隸的從屬に存しない。政治的な自己保存は藝術、科學、宗教法律及び道德の理想的價値の發達による。それは民族的及び世界人的傾向はこれらの教養にのみ結合するが故である」といふてゐるのを見てもその間の消息が知られる。彼にとつて政治史は文化史の臂部に過ぎないものである。

彼は又從來一般に行はれた如き個人働作を歴史題目として個人心理的に取扱ふラシヨナリストの歴史取扱に反對し、コムトと同じく集合的働作に注目し、コムトよりも更に深遠なる説明を與へて居り、社會心理的觀察の必要を陳述してゐる。彼の作「文化史とは何ぞ」には「社會心理的なものは只個人心理的なもの 結果的現象である、集合現象は決して個人のある意識されたる働作なくしては成立しない」こと、また「個人的歴史研究及び集合的歴史研究方法は共に正當であり、相互に補充する」ことをいふてゐるが、彼の概念及びその言現の本質的なものとして集合的方面に歸

つて行き、法制的に、因果的に認識さるべきものは只集合現象であるといふことになり、その著「歴史の新舊兩派の中には」「單一なる個性は非理であり、科學的認識の對象となり得ず」といひ、また「前世紀は總ての歴史事件を孤立した行爲から導き、また歴史の全體の範圍に個人的に優越な目的行爲及び個人心理の假定を用ひてゐるが。之は今日理論的には擁護され得ざるに拘らず、なほ實際意識的に、また無意識的に之に支配されてゐる」といひ、また其著「近代史學」の中には「かく歴史の個人心理的觀察法なるものは、今日明示されてゐる如くに、漸次その方法の完成に到達して、既に早くその限界までに進み、之に代つて社會心理的觀察法なるものが生じて、之が必要なものとして現されてゐるといふて居り、更に彼の著「個性及び社會心理的勢力」には「フムボルトは個性の上に非常な印象を置くが、かゝる取扱は自分の觀察とは根本的に違ふ。私には總ての深遠な歴史的理解は社會心理的進行の正則といふ考から出てゐる。之によつて時期が分たれるのである。個性はこの發展には入り込まない。フムボルトによると個性が支配してゐる」といふて居る。かくて彼の著史學の新舊兩派に述ぶるが如く、歴史を一方には實用的、若くは目的論的に説明する個人主義的歴史記述、他方には發展的、若くは集合的歴史記述に分類し、前者は全然藝術的に捕捉さるべきもので、舊來の歴史が之に屬し、後者は純粹に科學的に理解さるべきもので、文化史は之に屬するものであることを示してゐる。

彼はまたランケ流の觀念說 *Ideenlehre* に對して全然反對の態度を示し、彼の作「文化史的研究法」の中に「觀念說は除外なく働く歴史的因果法の採用を作くるもので、之は今日の科學的思想の性質から見れば、非常な誤であり、またこの缺點を除かんとすれば、概して觀念說をすてねばならない」といひ、また「觀念說の缺點は只觀察に導くだけで、概念に至るものではない。概念は比較によつて得られた判定の沈澱に外ならない。……科學は決して觀察的建物ではなく、却て常に概念に基づくものである。觀察は藝術に至り、概念のみが科學に至るのである。故に觀念說は決して歴史事實の科學的支配の目的を充實せしめず、却つてその最明瞭な藝術的觀察に貢獻するものである」といふて居り、またその著「近代史學」には「今日何人も最早歴史的觀念——少くとも全然、或はランケの意義に於てすら——の優越を信ぜず、之に反して之に含まる、個人心理的事件列を總合する觀念形式の必要を認めてゐる」といふてゐる然し彼は、またその論文「史學の新舊兩派の相違」の中に「發展的方法是從來の觀察法に對して更に深遠な觀察法であるから、之が從來觀念集合をその要素に於て説明してゐる」といふてゐる。彼はランケの觀念を以て超自然であり、社會史的要件の發展は内在的であるといふのであり、經驗的科學派たる彼は超自然的觀念を排して現實的要件の上に立つて歴史解釋を試みたのは當然といはねばならない。

ラムプレヒトは自己の主張を非常に忠實に固執し、終生その主張の爲に論争を事とした。この論争は彼のドイツ史の續篇第三卷に集められてゐる。エー・ベルンハイムは其著「歴史教育と歴史學」E. Bernheim, Geschichtsunterricht und Geschichtswissenschaft (Neue Bahnen X, 1899) にラムプレヒトの諸家に對する論争を批評して「この争は一世紀以來生じた歴史觀の大なる論争の不明瞭な副産物である」といふてゐるが、この場合決してかく輕卒に見るべきものではないと思ふ。彼の歴史的材料的取扱に關しては彼に批難すべき點はないが、理論の上から見ると複雑なるものを組織に導く争は決して副産物といふべきものではなくして知識の方法の發展の歴史上非常に重要な要件であるといはねばならず、彼の論争は單に世人の耳目を聳導させたといふ意義に止らず彼學者として當然取るべき道であつたと思ふ。

彼は彼の主張の爲に當代の多く史家と争ふた。エフ・ラファール、ゲー・フォン・ペロー、オー・ヒンツエ、ハー・オンケン、エム・レンツ、エフ・アイネツケ、ハー・フィンケハーデルブリニツク、ハー・リツアート等はその主なる敵手であつた。彼は「未來」誌 Zukunft を機關誌とし、通常に「經濟及び統計年鑑」Jahresbucher fuer Nationaloekonomie und Statistik にその論文を掲載した。然しラムプレヒトの學説は相當當時史學界に影響を及ぼしたものであり、また後世にも波動を残してゐるものであつて、カー・ブライシツヒ K. Breyssig アー・ウイルト、A. Wirth エー・ロー

トアツケル E. Rothacker の如き、其遺鉢を受けて居り。オー・スペングラー O. Spengler の如きも彼の傾向を繼いでゐるものである。

私はラムプレヒトの史觀の概要を述べた。之より更に進んで詳細に彼の史觀を研究して見る考である。